
研究ノート

大英博物館所蔵 医師 H・W・ダイヤモンドのコレクション
－メゾチント版画からコロディオン湿板写真へ－

Dr H. W. Diamond's Collection at the British Museum:
From Mezzotint Prints to Collodion Wet-Plate Photography

金光 陽子¹⁾*

Yoko KANEMITSU¹⁾*

Abstract

The Department of Prints and Drawings of the British Museum houses the unique collection of 17th-century early mezzotints assembled by Hugh Welch Diamond (1809-1886). Diamond, who was the superintendent of the Female Department of the Surrey County Asylum from 1848 to 1858, has been referred to as the father of psychiatric photography. He is also one of the most important pioneers of a 19th-century photographic technique, the so-called 'collodion process' or 'collodion wet-plate photography,' which was publicised by F. S. Archer in 1851. To date, little attention has been paid to the fact that Diamond was also an enthusiastic collector of works of art and antiquities. In particular, he had a special interest in the origin of the printmaking technique of early mezzotints whose process was invented and developed originally by Ludwig von Siegen in the mid-17th century. A careful reading of Diamond's collection of 17th-century early mezzotints enables us to argue that it is possible to link his interest in the development of the mezzotint with his role as a pioneer of collodion photography. This study examines Diamond's rare collection of 17th-century early mezzotints that the Department of Prints and Drawings of the British Museum acquired in 1838.

Key words

大英博物館、ヒュー・ウェルチ・ダイヤモンド、メゾチント版画、
コロディオン湿板写真、文化財
British Museum, Hugh Welch Diamond, Mezzotint, Collodion photography,
Cultural property

¹⁾ 順天堂大学国際教養学部 (Email: y-kanemitsu@juntendo.ac.jp)

* 責任著者：金光陽子

[2018年8月29日原稿受付] [2019年1月21日掲載決定]

1. はじめに

本稿は、大英博物館が所蔵する、19世紀イギリスの医師ヒュー・ウェルチ・ダイヤモンド (Hugh Welch Diamond: 1809-1886) (図1) が蒐集した版画コレクションを紹介するとともに、その実態を探ることを目的とする。

ダイヤモンドは、1832年にロンドンで大流行したコレラの防疫に尽力し、1834年に王立外科医師会の会員となり、1848年から1858年までの10年間、サリー州立アサイラムの女性病棟の管理監督者(院長)として勤務した医師である。医学史の分野では、精神障害をもつ患者をコロディオ(コロジオン)湿板写真で撮影することに成功し、1856年に王立協会で講演を行ったことから、ダイヤモンドは「精神医学写真の父」として位置づけられている。コロディオ湿板写真の撮影とは、まず、コロディオ溶液(傷口を保護するために開発された医療用の薬品)をガラス板に塗る。さらに硝酸銀溶液に浸して感光性を与え、撮影・現像する。湿った状態で撮影することから、湿板の名がついた技術である。1851年に、彫刻家フレデリック・スコット・アーチャー (Frederick Scott



図1 F・ベッドフォード、《H・W・ダイヤモンド》、1856 © Wellcome Trust (Photo: Wellcome images)

Archer) によって発表され、写真史の分野では、ダイヤモンドとアーチャーはコロディオ湿板写真の共同開発者として知られている。

コロディオ湿板写真は、幕末維新期に、オランダ人軍医ポンペ (Pompe van Meerdervoort) によって長崎にもたらされ、医学伝習所で、松本良順や上野彦馬など蘭方医たちが学んだ最先端の化学でもあった。例えば、上野彦馬の写真館で撮影された坂本龍馬の有名な立像写真や、長崎で医学や化学を学んだ田本研造が、箱館で撮影したとされる土方歳三の肖像写真には、コロディオ湿板写真の技術が用いられている。これらの写真は、幕末維新期の記憶の断片を伝える日本の遺産でもある。

現在、大英博物館が所蔵しているダイヤモンドのコレクションは、大まかに(1)版画(2)陶磁器(3)古物の3種類に分類することができる。(1)版画に関して言えば、ダイヤモンドは、17世紀のヨーロッパ版画—最初期のメゾチント(メゾティント)版画を中心に—を蒐集し、その数は約450点に及んでいる。ダイヤモンドは、医師として研鑽を積みながら、美術品や古物を愛好する熱心なコレクターでもあった。

筆者は、これまで定期的に大英博物館や大英図書館に赴き、19世紀イギリスの写真術や複製版画に関する研究調査を併せて行ってきた(金光、2007, 2017)。筆者が、ダイヤモンドが蒐集した版画コレクションを大英博物館・版画素描部のスタディ・ルームで初めて閲覧できたのは、2009年のことである。ダイヤモンドの版画コレクションは、大英博物館の収蔵庫に全て保管されているものの、現在、部分的に大英博物館のデータベースで検索できるようになってきている。だが、ダイヤモンドのコレクションの全体像はいまだにわからないことが多い。先行研究は少ないが、医学史や写真史の視座から、ダイヤモンドが撮影したコロディオ湿板写真を考察した先行研究は存在する(Gilman, 1976)。物理学者マイケル・ファラデー (Michael

Faraday) が、古代ローマ期の陶磁器に使われた釉薬(鉛)をめぐって、ダイヤモンドと交わした書簡に関する先行研究もある(Moshenska, 2015)。しかしながら、ダイヤモンドが蒐集した版画コレクションに絞ってまとめられた先行研究は、現時点で確認できていない。

そこで、本稿は、まず第1章から第4章にかけて、1838年にダイヤモンドが大英博物館に寄贈・譲渡した17世紀のメゾチント版画に焦点を当て、美術史、医学史、写真史の面から、「文化財」としての資料的価値を明確にする。第5章では、コロディオン湿板写真が、日本の近代医学の黎明期にもたらした遺産にも言及する。以上、ダイヤモンドが大英博物館に残した版画コレクションの再評価を行い、コレクターとしての彼の实像を明らかにしたい。

2. 大英博物館・版画素描部について

大英博物館は、医師ハンス・スローン(Hans Sloane)が蒐集したコレクションの寄贈によって、1753年にロンドンに設立された入館料無料の公共博物館である。ダイヤモンドの版画コレクションが保管されている大英博物館・版画素描部は、1808年に開設され、大英博物館にある10の学芸部門の中で最も古い部署の1つである。

大英博物館・版画素描部に学芸員として、2015年まで勤務したシーラ・オコーネル(Sheila O'Connell)によると、版画素描部が急速に発展した時期は、1837年から1853年までの15年間であるという。その15年間、10万点以上ものヨーロッパ版画が大英博物館のコレクションに加わったという(O'Connell, 1996, p.137)。

ダイヤモンドが蒐集していた17世紀のヨーロッパ版画の多くが肖像画であり、最古のメゾチント版画も含まれていた。そもそも、メゾチント版画とは、どのような技法なのだろうか。

メゾチント版画とは、オランダ出身の軍人ルートヴィヒ・フォン・ジューゲン(Ludwig von Siegen)が、1640-1650年代に発明した銅版画

の一種である。中間調子(mezzo = 中間 + tinto = 調子)という意味をもつメゾチント版画は、中間の階調の美しさからその名がついたとされる。「強い対比も微妙な階調も容易に表現し得る、輪郭を溶かすような柔らかい様式」(アデマールほか, 1986, p.89)をもち、古くからある木版画やエングレーヴィングなどの「線刻」による線描版画とは異なり、「点刻」による「点描法」がつくり出す豊かな階調を特徴としている。何よりも明暗の微妙な階調を面として表現するのに適し、絵画における明暗法を版画で再現するために発明された技法であった(国立西洋美術館, 1986, p.7)。19世紀に写真が誕生し、写真製版が主流になると、メゾチント版画は市場では淘汰されていく。だが、18世紀のイギリスでは、油彩画(肖像画)を複製するための版画技法として普及し、いわば巨匠の名画の複製画として珍重されてきた。

興味深いことに、大英博物館・版画素描部のメゾチント版画のコレクションの拡充は、1838年に、ダイヤモンドの17世紀のメゾチント版画が大英博物館に寄贈・売却されたことから始まったという(O'Connell, 1996, p.137)。つまり、ダイヤモンドが、寄贈・売却を通して、大英博物館のメゾチント版画コレクションの形成に寄与していたのだ。

では、なぜ、ダイヤモンドが所有していたメゾチント版画が、大英博物館・版画素描部に加わることになったのだろうか。表1は、ダイヤモンドのメゾチント版画が大英博物館に引き継がれることになった経緯を、元学芸員オコーネルの記述を補助線に、筆者が補足・修正する形で、わかりやすくまとめたものである。

表1にあるロンドン古物学協会は、1707年の創立以来、ピカデリーに拠点を構え、考古学や歴史に関する議論の中心でもあった。1834年にダイヤモンドは、ロンドン古物学協会のフェローに選出され、1836年に「最初期のメゾチント版画の見本」に関する発表を行った。メゾチント版画の発明者を、オランダ出身の軍

表1 ダイヤモンドのメゾチント版画コレクションが大英博物館に所蔵されるまでの経緯

1836年12月	ダイヤモンド： ロンドン古物学協会で発表 発表内容：「最初期のメゾチント版画の見本」
1838年2月	ダイヤモンド： 17世紀のメゾチント版画（11点） を大英博物館に寄贈 大英博物館・所蔵番号： 1838,0210.7～1838,0210.17
1838年4月	大英博物館： ダイヤモンドの17世紀のメゾチント 版画（208点）を購入（画商 W&G スミスを介して約210ポンド で購入） 大英博物館・所蔵番号：1838,0420.1 ～1838,0420.208

人ジーゲンであることを証明し、メゾチント版画の「起源」を明らかにしようとする試みであった (Diamond, 1838)。その先見性が、当時、所蔵コレクションが質・量とも発展途上にあつた大英博物館・版画素描部に刺激を与え、ダイヤモンドが蒐集した版画の寄贈の受け入れと購入につながつたと考えられる。また、1836年から1845年まで版画素描部で学芸員の職にあつたオランダ出身のヘンリー・ジョシ (Henry Josi) の尽力にもよるところも大きい (O'Connell, 1996, p.137)。学芸員ジョシがコレクションの拡充に努めた結果、オランダで誕生した最初期のメゾチント版画コレクションの散逸を防ぎ、保護することができたと推察される。

3. メゾチント版画の発明者ジーゲン

1838年2月、ダイヤモンドは所有していた17世紀のメゾチント版画のうち、11点を大英博物館に寄贈した。その2ヵ月後の4月に、発明者ジーゲンの最古のメゾチント版画（4点）を含む208点が、約210ポンドで大英博物館に売却された。学芸員ジョシは、この金額を「きわめて安価」と考え、大英博物館の理事会に入手を推薦したという (O'Connell, 1996, p.137)。

約210ポンドは、現在のレートに換算すると、約180万ポンドに相当する (MeasuringWorth.comを使用)。1ポンド=150円で計算すると、日本円で約270万円である。1838年の相場ではあるが、208点の17世紀のメゾチント版画を、日本円に換算して約270万円で大英博物館が購入した事実を考慮すると、投機目的や私利私欲とは距離を介した、ダイヤモンドの実像が見えてくるのではないだろうか。しかも、1838年は、イギリスが誇る美術の殿堂ロンドン・ナショナル・ギャラリー (国立美術館) が正式に開館し、「文化財保護」という概念がイギリスで定着しはじめた時期と重なっている。

ここで、図2のジーゲン作《聖家族と洗礼者ヨハネ (The Holy Family with St John the Baptist)》に注目してみたい。表1の「大英博物館・所蔵番号：1番 (1838,0420.1)」に相当する版画作品である。図3の油彩画を、1657年以前にジーゲンがメゾチントで版画化したものだ。図2と図3のタイトルは同じだが、作者が異なっている。図3は、バロック期のイタリアの画家アンニバーレ・カラッチ (Annibale Carracci) が1600年頃に描いた油彩画で、現在、ロンドン・ナショナル・ギャラリーの所蔵になっている作品である。正面中心に幼子イエスを抱く聖母マリアが据えられ、彼女から見て右側では、洗礼者ヨハネがマリアのヴェールで戯れ、左側には眼鏡と本を持った聖ヨハネが描かれている。この油彩画を版画化した図2が、1838年に大英博物館のコレクションに加わったことは、「文化財保護」の点からも興味深い。

実は、図3のカラッチの油彩画は、「モンタルトのマドンナ」とも呼ばれ、複製版画が多数制作されるなど、当時から大変人気があつた。しかしながら、1672年に書かれた記録を最後に、約300年以上もの間、行方不明になっていたが、突如、姿を現すという事件が起こつた。2003年にサザビーズ社のオークションに図3が出品された際、ロンドン・ナショナル・ギャラリーが寄付金等で集めた約80万ポンド (約



図2 ジーゲン、《聖家族と洗礼者ヨハネ（図3にもとづく）》、before 1657、メゾチント、大英博物館所蔵

© The Trustees of the British Museum. Shared under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International (CC BY-NC-SA 4.0) licence.

1億2000万円）で購入し、傷んだ状態であったため、残された複製版画や科学調査を手がかりに修復洗浄をほどこした。現在は、ロンドン・ナショナル・ギャラリーで常設展示されている（Keith, 2008）。

図2は、行方不明になる前の保存状態やカラッチの聖母子の柔らかさを、1640-1650年代に発明されたばかりのメゾチント版画技法で記録したジーゲンの遺産でもある。約300年以上もの間、所在不明の失われていた名画の面影をとどめ、後世に伝えることができた点からも、貴重な「文化財」の役割を果たしてきたとも言えよう。

では、前掲の表1で記載した、1838年2月に大英博物館にダイヤモンドが寄贈した11点と、1838年4月に買い上げられた208点には、本章で取り上げたジーゲン以外に、どのような人物のメゾチント版画が含まれていたのだろうか。



図3 カラッチ、《聖家族と洗礼者ヨハネ》、c. 1600、油彩画、ロンドン・ナショナル・ギャラリー所蔵

図版出典：Keith（2008）p. 47.

その内訳を筆者が調べたところ、イギリスとオランダに交友関係をもちながら、最初期のメゾチント版画の開発と普及に貢献した人物が占めていたことが判明した。紙面の都合上、その主要な人物に絞ってまとめたのが表2である。次章では、(1)～(4)のうち(4)アブラハム・ブローテリング（Abraham Blooteling）に焦点を当ててみたい。

4. ブローテリングのメゾチント版画

ブローテリングは、プリンス・ルパートの庇護を受け、先輩にあたるワレラント・ファイラントとともに活動し、ロンドンで版画家、彫版師として成功した出版業者でもある。イギリスの市場にメゾチント版画を普及させた立役者でもあったが、ブローテリングに関する先行研究は少なく、活動は不詳な部分も多い（Curd, 2010, p.127）。

例えば、ブローテリングが携わった仕事に、オランダの医師ビドロ（Govard Bidloo）によ

表2 ダiamondが蒐集していた最初期のメゾチント版画の主要な開発者たち

<p>(1) ルートヴィヒ・フォン・ジーゲン (Ludwig von Siegen: 1609-1680) 1640-1650年代に、メゾチント版画技法を 発明したオランダ出身のドイツの軍人。</p>
<p>(2) プリンス・ルパート (Prince Rupert: 1619-1682) イングランドの軍人で、チャールズ1世の甥。 1650年代半ばに、ジーゲンからメゾチント 版画技法を大陸で習い、1660年にイギリスに 戻り、メゾチント版画を伝えた。</p>
<p>(3) ワレラント・ファイラント (Wallerant Vaillant : 1623-1677) 1650年代半ばにルパートの助手を務め、 オランダで活躍したフランス人画家、版画家。</p>
<p>(4) アブラハム・ブローテリング (Abraham Blooteling : 1640-1690) オランダ人版画家、彫版師、出版業者。 1673-1678年に、プリンス・ルパートの庇護の もと、ロンドンに滞在する。メゾチント版画を イギリスで普及させた中心的人物でもある。</p>

る『人体解剖学 (*Anatomia Humani Corporis*)』(1685)の出版がある。この図譜に所収された105枚の解剖図(エングレーヴィング)の元絵は、巨匠レンブラント(Rembrandt)の弟子ヘラルト・デ・ライレッセ(Gerard de Lairese)が描いたものだ。

ビドローの解剖図は、イギリスの医師カウパー(William Cowper)によって剽窃されたり、『解体新書』(1774)の挿絵(小田野直武による)に影響を与えたりしたことは、医学史では知られているところでもある。だが、元絵をビュランで彫る作業にあたり、ブローテリングが彫版師として中心的な役割を果たし、彼の卓越した技術が、写真のような迫真的な105枚の解剖図を支えていたことは、今日ではほとんど顧みられることはない。美術史学の立場から、坂本満氏は、ビドローの解剖図の出来栄は、「ブローテリングの版画の中でも丁寧な優れた作品であるといっても過言ではない」と述べている(坂本, 1979, p.B-21)。

さて、Diamondが蒐集したブローテリン

グのメゾチント版画のうち、特に印象深い1点を検討してみたい。図4の《ユディット(Judith)》(1670-1690)(所蔵番号: 1838,0420.88)である。図4は、1670-1690年頃のブローテリングによるメゾチント版画と考えられ、前掲の表1にある、1838年4月に大英博物館が購入した208点のうちの1点である。図5は図4の原画であり、1504年にルネサンスの巨匠ジョルジョーネ(Giorgione)が描いた《ユディット》である。旧約聖書外典に登場する、將軍ホロフェルネスの首を切った寡婦ユディットが主題であるものの、ホロフェルネスの「切られた首」は、画家ジョルジョーネ自身の自画像であると言われており、現在、エルミタージュ美術館で常設展示されている。図5の油彩画《ユディット》は、1772年にエルミタージュ美術館に所蔵される以前から、ジョルジョーネではなく、ルネサンスの巨匠ラファエロ(Raffaello)に帰属する作品として考えられていた。19世紀まで図5の作者がラファエロとされたのは、ジョルジョーネの真筆とされる作品がきわめて少ないだけでなく、度重なる修復がほどこされた結果、ジョルジョーネが制作した当時とは、かけ離れた画面に変貌してしまったからである(Fomicieva, 1973)。だが、1969-1971年に、エルミタージュ美術館が行った修復洗浄作業により、現在では、ラファエロではなくジョルジョーネの真筆として、エルミタージュ美術館を代表する絵画となっている。

図4のブローテリング作《ユディット》は、足元に置かれていたホロフェルネスの首を手元に置き、全身像を四分の三身像に翻案することで、ユディットの内面がクローズアップされている。メゾチント版画特有の漆黒の背景と、輪郭線を溶かすような光と影の明暗の階調表現が、ユディットの謎めいた表情を、よりとらえがたいものになっている。

図4は、18-19世紀に過度な修復が加わる前のジョルジョーネ作《ユディット》(図5)の保存状態を、最初期のメゾチント版画で収めた

貴重な1点とも言えるだろう。図2と図3でも比較検討したように、1838年に大英博物館に寄贈・売却されたダイヤモンドの版画コレクションは、失われていた名画の記憶を喚起し、その記憶の断片を21世紀まで継ぐことができた点で、「文化財保護」の文脈からも見直すことができるのである。

5. 文化財としてのコロディオン湿板写真へ

大英博物館・版画素描部の元学芸員オコーネルは、このように述べている。

メゾチント版画の開発に対するダイヤモンドの関心を、画像を得るために光を用いる写真（コロディオン湿板写真）の開発者としてのダイヤモンドの役割に、結びつけていく衝動にかられてしまう（O'Connell, 1996, p.138）。

オコーネルは、メゾチント版画とコロディオン湿板写真の結びつきを示唆するだけにとどめているが、そもそも写真は、画家が積み上げてきた芸術的な成果と、科学的な知識が融合して19世紀に誕生した新しい複製技術である。技術的な面を簡潔に説明すれば、メゾチント版画とは「点描法」であり、「細粒点刻下地」という、画面全体が無数の「点」で埋めつくされた銅板を、削ったり磨いたりすることで、光と影の階調を出していく技術である。発明者ジーゲン自身も、メゾチント版画は、エンブレイヴィングやエッチングのような「線」ではなく、あくまでも「点」によって成り立っていることを強調していたという（佐川, 2003, p.14）。

では、コロディオン湿板写真は、どうだろうか。冒頭でもふれたように、ダイヤモンドとコロディオン湿板写真を共同開発した人物が、彫刻家のF・S・アーチャーである。アーチャーは、1851年に『ケミスト (Chemist)』誌でその技術を発表し、数年後に私家版『ガラスの上のコロディオン法 (The Collodion Process on Glass)』



図4 ブローテリング、《ユディット（図5にもとづく）》、1670-1690、メゾチント、大英博物館所蔵

© The Trustees of the British Museum. Shared under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International (CC BY-NC-SA 4.0) licence.



図5 ジョルジョーネ、《ユディット》、1504、油彩画、エルミタージュ美術館所蔵
図版出典：高階・井上（1984）p.5.

(1854) と題した小冊子を出版した。現在、大英図書館に所蔵されているその小冊子を実際に参照してみると、現像とは「銀の析出」であるとする解説にページが割かれている。つまり、コロディオン湿板写真とは、コロディオン溶液が塗られたガラス板を硝酸銀溶液に浸し、ヨウ化銀を生成させて感光し、光の当たっている部分に「銀の粒子」を定着させる技術ということになる (Archer, 1854, p.32)。

コロディオン湿板写真 (銀の粒子) は、メゾチント版画 (点描法) とは材料も技術も全く異なっている。だが、「点 (粒子) の集合」によって画像が形成される点では、メゾチント版画はコロディオン湿板写真を予感させ、親和性があるとも言えよう。ダイヤモンドにとって、メゾチント版画とは、「点 (粒子) の集合」の仕組みを先取りした画像処理技術であり、コロディオン湿板写真 (銀の粒子) とは、メゾチント版画が「進化」した、その延長線上に位置づけられるべき複製技術だったのではないだろうか。

さらに、「コロディオン (コロジオン)」が、1848年に発明されたばかりの「新薬」で、傷口を保護するために、水絆創膏や液体包帯として用いられてきた薬品でもあった点も興味深い。アーチャーは前述の小冊子の中で、コロディオンは、1848年に医師メイナード (John Maynard) がアメリカの医学系学術誌で発表して初めて知られるようになったと解説している (Archer, 1854, p.18)。

コロディオン湿板写真の撮影・現像には、撮影者独自の薬品の工夫が必要とされる。アーチャーが彫刻家でもあったことから推察すると、化学や薬学の知識を医師ダイヤモンドから学んだ可能性が高い。1851年にアーチャーが発表したコロディオン湿板写真は、ガラス板に独自の薬品調合法を組み合わせることで、それ以前の写真術 (ダゲレイタイプやカロタイプ) にはない、肌理が細かく、階調が豊かで、高精細な画像を獲得することが可能になり、撮影時間も秒単位にまで短縮することができたのであ

る。

そして、このコロディオン湿板写真は、幕末維新期に日本に持ち込まれ、21世紀の今、19世紀の日本を記録した「文化財」として、日本や欧米の博物館や資料館の貴重なコレクションとなっている。その代表的な例に、冒頭でも述べた坂本龍馬の立像写真 (高知県立歴史民俗資料館所蔵) や、土方歳三の肖像写真 (土方歳三資料館ほか所蔵) を挙げることができる。

実は、アーチャーが特許を取らなかったこともあり、幕末維新期に日本でも広く普及した写真術が、コロディオン湿板写真であったことは、一般にはさほど知られていない。例えば、龍馬ともゆかりのあった板倉 (淡海) 槐堂が、長崎より写真機を取り寄せ、1859年に鳩居堂第7代目当主熊谷直孝を撮影した。鳩居堂が所蔵するそのコロディオン湿板写真が、現存する京都最古の湿板写真として、2001年に京都市指定文化財に指定されている (京都市歴史資料館, 2018)。また、オーストリア国立図書館が所蔵する、幕末・明治初期の日本を記録したガラス原板ネガ・コレクションには、1859年にイギリス領事ガウワー (Abel Gower) が撮影した長崎出島のネガが保管されている。このネガが、長崎を写した現存する最古のコロディオン湿板写真であることが明らかになってきている (東京大学史料編纂所, 2018)。

1857年来日し、長崎に医学伝習所を開設したオランダ人軍医ポンペが、コロディオン湿板写真の技術を日本に持ち込んだことが、日本における実用的な意味での写真術のはじまりともされている。その医学伝習所に集まった若き蘭方医たち (松本良順、前田玄造、上野彦馬ほか) が、ポンペやスイス人写真家ロシエ (Pierre Rossier) より、コロディオン湿板写真を学んでいた。ポンペの弟子の1人でもあった松本良順 (順) は、『松本順自伝 (蘭疇自伝)』(1906)の中で、「イギリス人 (実際には、スイス人写真家ロシエを示す)」より前田玄造がコロディオン湿板写真を習得したことを回想しながら、「こ

れぞすなわち我が日本国において写真をなせし
嚆矢」と記している（小川・酒井，1980, p.21）。

長崎の医学伝習所で化学を学んだ上野彦馬の
写真館で 1866 年頃に撮影された有名な 1 枚が、
坂本龍馬の立像写真であった。一方、田本研造
は、長崎出島の吉雄圭齋のもとで医学や化学を
学んだが、壊疽により右足を切断するという身
体障害が契機となり、写真家としての活動をは
じめた。土方歳三の肖像写真は、1868 年頃に
田本研造が箱館で撮影したとされている。この
ように幕末維新期の記憶の断片を伝える写真の
数々が、コロディオン湿板写真であったことを
想起すれば、大英博物館所蔵のダイヤモンドが
蒐集したメゾチント版画のコレクションも、日
本にとってより一層身近に感じられるかもしれ
ない。ダイヤモンドがアーチャーと共同開発し
たコロディオン湿板写真が、日本の近代医学の
黎明期とも決して無縁ではない点を、最後に強
調しておきたい。

6. 結びにかえて

以上、これまで行ってきた大英博物館や大英
図書館での調査、大英博物館のオンライン・デー
タベースの検索をもとに、ダイヤモンドが蒐集
した 17 世紀のメゾチント版画に焦点を当て、
筆者が得られた知見をまとめた。ダイヤモンド
のコレクションは、美術史、医学史、写真史が
交差するだけでなく、「文化財保護」の観点か
らも見直されるべきであり、ダイヤモンド自身
も、大英博物館の歴史に刻まれるべきコレク
ターでもあったと言える。

現在、大英博物館・版画素描部に所蔵されて
いるダイヤモンドの版画コレクションは、額装
されておらず、保管ボックスに収まった状態
で収蔵庫に眠っている。1838 年にダイヤモンド
が大英博物館に残した遺産は、今、約 180 年間
の長い沈黙を破り、大英博物館の収蔵庫からよ
うやく静かに語りはじめていたのである。

引用文献

- ジャン・アダマールほか（1986）. 『版画』（幸
田礼雅訳）白水社.
- Archer, F. S. (1854). *The Collodion Process on
Glass*. London: Printed for the author.
- Curd, M. B. H. (2010). *Flemish and Dutch Artists
in Early Modern England: Collaboration and
Competition, 1460–1680*. Surrey: Ashgate.
- Diamond, H. W. (1838). Earliest Specimens of
Mezzotinto Engraving. *Archaeologia*, xxvii,
405-409.
- Fomicieva, T. (1973). The History of Giorgione's
'Judith' and Its Restoration. *The Burlington
Magazine*, Vol.115, 417-420.
- Gilman, S. L. (1976). *The Face of Madness:
Hugh W. Diamond and the Origin of
Psychiatric Photography*. NY: Brunner/Mazel.
- 金光陽子（2007）. 「オリジナリティと複製：J・
E・ミレイの《シャボン玉》とペアーズ石
鹸の広告」『美学』第 230 号，第 58 巻、第
2 号，29-42 頁.
- 金光陽子（2017）. 「19 世紀の「医学」と「芸術」
の対話－1851 年前後の J・E・ミレイの 3
つの絵画を通して－」『順天堂グローバル
教養論集』第 2 巻，2-16 頁.
- Keith, L. (2008). Annibale Carracci's 'Montalto
Madonna'. *National Gallery Technical Bulletin*,
Vol.29, 46-59.
- 国立西洋美術館（1986）. 『国立西洋美術館年報』
第 18 号.
- 京都市歴史資料館（2018）. 『特別展 明治 150
年 京都、写真の時代』京都市歴史資料館.
- Moshenska, G. (2015). Michael Faraday's
Contributions to Archaeological Chemistry.
AMBIX, Vol.62, 266-286.
- O'Connell, S. (1996). William Second Baron
Cheylesmore (1843-1902) and the Taste for
Mezzotints. In A. Griffiths, (Ed.), *Landmarks
in Print Collecting: Connoisseurs and Donors
at the British Museum Since 1753* (pp.134-

- 158). London: British Museum Press.
- 小川鼎三・酒井シヅ (校註) (1980). 『松本順
自伝・長与専斎自伝 (東洋文庫 386)』平
凡社.
- 佐川美智子 (2003). 「初期メゾチントについて
のメモ」『町田市立国際版画美術館・紀要』
第7号, 13-17頁.
- 坂本満 (1979). 「美術史からみたビドローの解
剖図」小川鼎三・酒井シヅほか (解説)『ゲッ
チンゲン医学古典文庫覆刻版・解説』
(B-13-B-22頁) 菜根出版.
- 高階秀爾・井上靖 (編) (1984). 『ジョルジョー
ネ/ティツィアーノ』中央公論社.
- 東京大学史料編纂所 古写真研究プロジェクト
(編) (2018). 『高精細画像で甦る 150年
前の幕末・明治初期日本 ブルガー & モー
ザーのガラス原板写真コレクション』洋泉
社.